

43

世界文学全集

ガリヴァ旅行記	スウィフト／中野好夫訳
幻想を追う女	ハーディ／河野一郎訳
ジーキル博士とハイド氏	スティーヴンスン／佐々木直次郎訳
青春	コンラッド／田中西二郎訳
アッシャー家の崩壊／黒猫	ポー／佐々木直次郎訳
賢者の贈りもの／最後の一葉	O・ヘンリー／大久保康雄訳

世界文学全集 43

ガリヴァ旅行記／幻想を追う女／ジーキル博士とハイド氏／
青春／アッシャー家の崩壊／黒猫／賢者の贈りもの／
最後の一葉

スウィフト／ハーディ／スティーヴンスン／コンラッド／
ポー／O・ヘンリー

訳者 中野好夫／河野一郎／佐々木直次郎／田中西二郎／
大久保康雄

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

ガリヴァ旅行記	3
幻想を追う女	293
ジーキル博士とハイド氏	325
青　　春	403
アッシャー家の崩壊	445
黒　　猫	469
賢者の贈りもの	483
最後の　　葉	493
人と作品	503

ガ
リ
ヴ
ア
旅
行
記

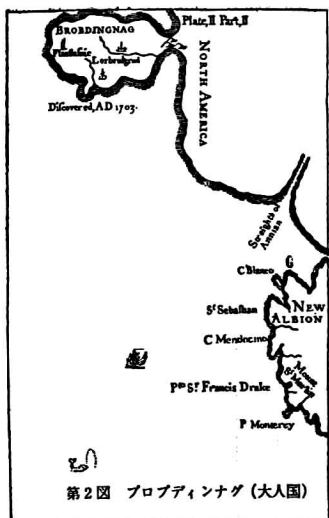
Gulliver's travels

by

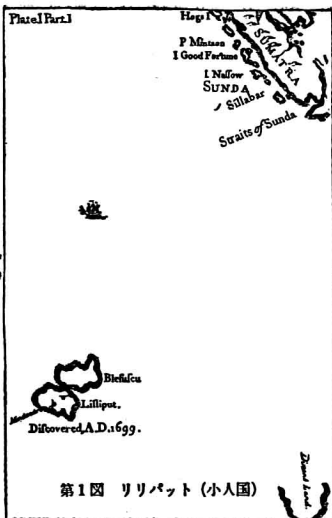
Jonathan Swift

ガリヴァ旅行記 目次

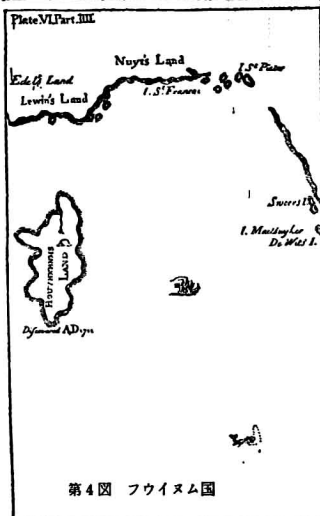
刊行者の言葉	セ
リリバット（小人国）渡航記	九
プロブディンナグ（大人国）渡航記	七〇
ラビュタ、バルニバービ、ラグナグ、 グラフダブドリッフおよび日本渡航記	一八
フウィヌム国渡航記	二〇二
書簡、船長ガリヴァより従兄シンブソンへ	二八六



第2図 プロブディンナグ (大人国)



第1図 リリパット (小人国)



第4図 フウイヌム国



第3図 ラピュタ周辺

刊行者の言葉

本旅行記の著者レミュール・ガリヴァ氏は、^{うせい}迂生年
来の親友であるばかりでなく、また、母方をおして
親戚関係でもあるのであります。三年ばかり以前、ガ
リヴァ氏はレドリッフの彼の家へ殺到する好事家連に
いや気がさし、郷里なるノティンガムシアはニユアク
の片ほとりにささやかなる地所と手ごろなる居宅とを
もとめ、^{じらい}爾来この地に隠棲してゐるのであります、
彼に対する近隣の尊敬は依然たるものであります。

ガリヴァ氏の生まれは、その父君のおられたノティ
ンガムシアであります、直接彼から聞いたところに
よりますと、家は本来オックスフォードシアの出である
そうで、現に迂生が調べましたところでは、たしかに
同州バンベリの教会墓地に、ガリヴァ家の墓碑が数基
ございました。

彼はレドリッフを引き払います以前に、じつは本書

の原稿を迂生に委ねまして、その処置はいっさい迂生
の適当な判断に一任すると、そういうことでございま
した。で、迂生はたんねんに、じつに三度閲読いたし
ました。文体はまことに平明簡潔でございまして、強
いて欠点と申しますれば、著者が、そこは世上旅行者
のつねでありまして、詳細委曲を尽くしすぎていると
でも申しましようか。だがしかし、全編を通じて真実
の気はおおい難く、ことに著者の正直さに対する世評
は非常なるものでありまして、現にレドリッフ近郷に
おきましては、何事にまれ確言する場合には、ガリヴァ
氏の言のごとく真実である、と申し添えますのが、
^{ことわざ}諺めいたものにさえなっているようであります。

迂生はその後、著者の了解を得まして、数人の大家
諸氏に該原稿の内閲を乞い、その忠告によりまして今
これを上梓いたす次第であります、少なくともここ
当分、本書が青年読者諸君にとって、世上流布の政治
政党の雑書類などよりは、はるかに興味深いものであ
ろうことを信ずるものでございます。

なお本書は、各航海中における風向、潮流ならびに
偏差、方位等に関するおびただしい叙述、あるいは海
語によって記された、暴風雨中の船の操作に関する詳

細な描写、あるいはまた経度緯度に関する記事等を、
迂生の判断により思い切って削除したものであります
が、もしそれを致しませんならば、量において本書は少
なくともこの二倍大になったであります。この点
はガリヴァ氏として多少不満もあるうと存じますが、
迂生としては、できるかぎり本書を一般読者の理解に
近づけたいという微意でございました。もっとも海上
生活に関する迂生の無知からして、多少とも過誤を犯
しているような点がございますならば、その責は一に
かかって迂生にあるわけであります。もしまた旅行家
諸彦にして、本著作の全編を、著者の筆になる原形そ
のままにおいてご覧になりたきご熱心なる意向の向き
は、喜んでご要求にそうつもりであります。

本著者に関してこれ以上の詳細は、本書冒頭の章に
ついてご承知を願いたいと存じます。

リチャード・シンブソン敬白

第一編 リリパット（小人国） 渡航記

第一章

著者のおいたち、家族のこと——はじめて航海に出ずる顛末——難船、身をもつて泳ぎ逃れ——無事リリパット国海岸まで辿りつき——囚われの身となりて、護送されし次第条

親父といふのはノティンガムシアでわずかばかりの土地持ちだった。我輩は五人兄弟の三番目であつたが、十四になると、親父は我輩をケインブリッジのエマニエル学寮に遊学させた。ここで三年間みっちり勉強したのであるが、なにぶん貧しい身代には、我輩の遊学費が（といつても、むろん、ひどく足りないがちな仕送りであつたが）、どうにも大きすぎる負担だといふので、当時ロンドン一流の医者でジェイムズ・

ベイツ氏というのに書生にやられた。ここに四年間、その間親父からも、ときどきわずかながら送金があつたので、こいつを資本に航海術とかその他いろんな数学、つまり旅行でもしようという人間にさしずめ役に立つ学問を勉強した。というのが、我輩常に信じていたことは、他日かならず海外旅行に出る、これが自分の運命だと、そんな気がしていたからである。ベイツ氏のもとを去ると、親父の家へ帰り、親父やジョン伯父、それから他の親戚たちの助力を得て現金四十ポンドと、それに生活費として年々三十ポンドを出してやるという約束を貰つてライデン（ライデン大学の所在地）へと赴いた。ここでまた二年と七カ月、将来長い航海に出た場合などにならず役立つものと思つて、医学を修めた。

ライデンから帰ると、早速、恩師ベイツ先生の推薦で、エイブラハム・パネル中佐という男が船長をしている「燕」号というのに船医となり、ここでも三年半、レヴァント（今のアフリカ、パレスチナ地方）その他へ一、二度航海をやつた。帰ると今度はロンドンで一つ開業してみようと思つた。さいわいベイツ先生も力になつてくれて、数人の患者まで紹介してもらつた。

まずオールド・ジュリ（訳注 ロンドン地名。中
央部チープサイドの一割）に小さい家を手に入れ、それからいつそ身を固めてはという話で、ニューゲイト街（訳注 ロンドンの地
名。中央部にあり）の靴下屋（くつした）で、エドマンド・バートンという者の二女メアリ・パートンを貰い受けることになり、その際、持参金として四百ポンドを貰った。

ところが二年ばかりすると、ベイツ先生はなくなれる、とほかに友人といつても殆どない我輩なので、商売はそろそろ左前になってくる。それというのが同業者の殆どたいていのものがやっている不正、そいつを真似ることだけは我輩の良心が許さなかったからだ。そこで家内や二、三の知人とも相談の上、も一度船に乗る決心をした。それから次々に二つの船の船医を勤め、六年間に数回、東西インドに航海したり、それでまず身代のほうもいくらかふえたというわけだ。船には相当書物の備えつけがあったので、ひまな時は古今の文豪の作物を読みふける、で、また上陸の時は土地の人情風俗を観察するなり、言語を勉強するなりして時間を消した。ことに語学の勉強という点では、我輩はよい記憶力のせいもあって極めて造作なくやれた。

上にいった最後の航海があまり思わしい結果でもなかったもので、今度は海もいやになり、いつそ妻子と一緒に暮らしてみようかという気になった。住居も前のオールド・ジュリからフェター横町（訳注 ロンドンの地
名。中央部にあり）に移り、さらにそこからウォピング（訳注 ロンドンの地
名。東部、いわゆる
イースト・エンドにあり、ロンドン
橋の下流ニマイル、テムズ河に臨む）に移って、まず船乗り相手の商売でもしようというつもりであったのだが、それもいっこうに面白くない。今に、今にの空頼みで三年ばかりたった末、とうとう「羚羊」号の船長で、南洋のほうへ出かけようというウィリアム・プリチャードという男から持ち込まれたうまい話を、我輩は早速承知、船は一六九九年五月四日プリストル（訳注
ランド西南部、グロ
スター州にある港）を出帆、はじめのうちはまったく上首尾の航海だった。

ところでこの海上の出来事をくだくと並べ立てて、読者諸君をうるさからせるのは、いろんな理由でくだらん話だと思ふ。ただわれわれの船はそこから東インドへの航海中、ひどい暴風雨にあつてヴァン・デーマンズ・ランド（訳注 多少異説もあるが、濠洲の東南
海中にある今のタスマニア島の古名）の北西方まで流されていたということだけをいえばよい。天体観測の結果、われわれの位置は南緯三十度二

分にあることがわかった。船員のうち十二人は激しい労働と栄養不良で死亡、残りの者もひどい衰弱だった。十一月五日、それは向こうでは初夏なので、ひどい霧だったが、その中を船員たちは船から僅々半ケールとは離れないところに一つの岩礁を見出した。だがなにしろ猛烈な風なので、たちまち真つ向微塵に打つけてしまって、船はあつというまに真つ二つ、六人の船員——我輩もその一人だったのだが——はボートを下ろして、やつとのこととで本船と岩礁とから離れることができた。我輩の計測では三リーグばかりも漕いだころだろうか、本船にいた時から労働で疲労しきっていたわれわれは、もうこれ以上どうにも動けなくなってしまった。しかたがない、われわれは波のまにまに運を天にまかせていたが、それも半時間ばかりもすると、いきなり北の突風がボートを転覆してしまった。ボートの仲間はどうなったか、それから岩の上に逃げ出した連中も、本船に居残ったものも——それはわからない、だがいずれ一人残らず死んだものと我輩は決めている。ところで我輩だが、ただ運命のまにまに泳ぎながら、風と潮流とに押し流されていた。何度も足を下げてみたが、海底にはとどかない。だが、も

ういよいよいけない、からだか動かなくなったという時に、ふと気がついてみると背が立つではないか、しかもそのころは暴風雨も著しく静まっていた。ひどい遠浅なので、かれこれ一マイルも歩いて、やつと岸に辿りついたようなわけだが、それは夜の八時ころだったかと思える。さらに半マイルばかりも進んでみたが、家一軒、一人見えるようすはない——いや、少なくともひどい衰弱で、そんなものはどうてい目にはいかなかったのである。極度の疲労だった。それに暑さやら、本船を捨てる時に飲んだ半パイント（約一合半）のブランドイのききめやらで、すっかり眠くなった。で、草の上に横になったが、それがまた短い、柔らかな草でそのまま我輩は眠ったの、眠らないの、生まれてこの時ほどぐっすり眠ったことはなかった。かれこれ九時間ばかりも眠ったろう、目をさましてみるとちょうど夜明けだったから。起きようと思ったが、からだか動かない。なるほど見ると、我輩あおむけに寝ていたのだが、手も足も左右に大地にしっかり縛りつけられ、長く房々としていた髪の毛も同様である。さらに同じように、腕の下から太股へかけて幾重にも細い紐が我輩のからだをからんでいるのに気がついた。ただ

あおむけに空が見られるだけである。太陽はだんだん暑くなってくるし、目は痛いほどギラギラする。まわりで何かガヤガヤという騒ぎが聞こえるのだが、なぶん今の寝たままでは空しか見えない。やがて我輩の左足を、なにか生き物がゴソゴソ動いているような気がする、しかもそいつはそろそろ胸の上を通って、とうとう顎のあたりまでやって来た。できるだけ下目を使ってはじめて分ったことは、それが人間、しかも身の丈六インチとはない、それで手には弓矢、背中には簞を負った人間だということだった。そのうちに我輩はさらに少なくとも四十人余り（まったく我輩の推算なのだが）の同類が、そのうしろからゾロゾロついてきていることが分った。いや、我輩、驚いたの驚かないの、いきなりワッと大声を立てたものだから、奴さんたちたちまちたまげて逃げてしまった。あとになつて聞いた話では、なんでも四、五人の者は我輩の胸腹から地面へ跳び下りたために、怪我人まで出たそうだ。だが奴らはすぐに引き返して来た、そして一人の者はとうとう我輩の顔の全貌が見渡せるころまでやって来たと思うと、さも感に堪えたように、両手と目を高く挙げながら、黄色い、しかしはっきりした声

で、「ヘキナー、ディーガル！」と呼んだのである。と、ほかの連中も何度か同じ言葉をくり返すのだが、その時は、むろん我輩にはなんのことだかわからなかった。もちろんその間、ご推察までもなく、我輩ははなはだ気味悪る悪る、じっと寝たままでいた。が、とうとう逃げようと思って身をもがいてみると、うまい具合に紐が切れて、左腕を地面へ縛りつけている杭をねじ切った。というのは、左腕を顔の前まで持って来てみて、奴らのくくり方がわかったからだ。と同時にこいつはだいぶ痛かったが、力まかせにグイと一つ引く張って、左側の髪の毛を縛っている紐を少しばかりゆるめることができ、やっと二寸ばかりは首が回るようになった。だが、かんじんの奴らは、引っ捕えてやろうとするうちにまたしても逃げてしまった。とたんに、ひどく黄色い声でなにか大声に叫んだものがあつたが、やがてそれがやんで、だれか一人、「トルゴウ、フォナック」と怒鳴ったかと思うと、たちまち我輩の左手に百本余りも矢が雨と降りそそぐ、それがまるで針でも刺すようにチクチクするのだ。おまけにちょうどヨーロッパ人が爆弾でも発射するように、大空に向かっていっせいに矢を射るのである。とそれが大部分

(痛くはいっこうないが)我輩のからだの上に落ちてくるようだし、なかには顔に落ちるものもある。我輩は大急ぎで顔をおおったが、この矢の雨がやむと、悲しいやら痛いやら、さすがの我輩もウンウン唸りはじめた。そして、またしてものがれようとすると、今度は前よりいっそう激しく矢を射かけてくる、なかには槍をもって我輩の脇腹を突きに來た奴もあつたが、さいわい、これは皮製ジャケツを着ていたので通らなかつた。そこで我輩、これはじつとしてゐるのがいちばんの上策だと思つた。このまま夜になるまで寝てゐることだ、夜になれば左手はすでに自由なのだから、のがれるのは造作ない。つぎは住民どもの問題だが、これはたとえ何千何万押し寄せようとも、いま見たような小っぱけな奴らであるかぎり、結構我輩ひとりで十分だ、それは立派に自信があつた。ところがなんと計算はまんまとはずれた。我輩がおとなしくなつたと見ると、奴らはもう矢を射かけるのはやめた、だが、一方、耳にはいる騒がしきからすると、人数はいちだんとふえたらしい。そしてちょうど我輩の右の耳から、ものの二間ばかりはなれたところで、かれこれ一時間以上も、まるで一心に働いてゐるような、しきりに物を打

つ音が聞こえていた。杭と紐の許すかぎり、顔をそのほうへねじむけてみると、これはまた地面から高さ一フィート半ばかりの舞台が出来上がっている。この国の人間なら、まず四人は乗れるかしら。登れるように梯子まで二つ三つかかっている。ところでこの舞台の上に立って、彼らの一人——どうやら身分のある男らしかつたが——が長い演説をやりだした、むろん、我輩には一語として分らない。だが、そうだ、これだけはいつておかなければならぬ、つまりこの大將らしい男がいよいよ演説をはじめる前に、この男は三度「ラングロウ、デフル、サン！」と大声に叫んだのである(この言葉、それからさっきいった言葉はその後、幾度も聞くことがあつて、わけも説明してもらつた)。すると五十人ばかりの島民がバラバラツとやって来て、我輩の頭の左側を縛っている紐をみんな切つてくれた。そこではじめて我輩も右を向くことができるようになった。例の演説をした男の風采身なりを観察することもできるようになつたが、年配は中年といったところか、背丈も侍立している三人——一人は侍童で、主人の裾を捧持しているのだが、背丈はせいぜい中指に毛の生えたくらい、他の二人は両側に立って、脇侍

というかたちだった——よりはひとときわ高かった。察するところ、先生、あるいは威嚇いげくするごとく、あるいは氣をもたせるごとく、あるいは憐れむがごとく、はたまたあるいは慈しむがごとく、その雄弁家ぶりにいたっては、技術まさに一〇〇パーセントというところだった。我輩はごく簡単に、しかしいとも鞠躬きよく如たる態度、すなわち日輪も照覧あれとばかりに、高く左手をかかげ、目ははるかに天を仰いで奉答し奉ったものである。なにしろ本船を見捨てる何時間か前に物を食べたきり、腹はひもじさにグーグー鳴るし、それにこのところ自然の要求うたた急なるものがある。もはや我慢はできなくなった。（無作法かなんだか知らないが）我輩はやたらに口へ指をやっては、欲しいのは食物なのだということを示してやった。ハーゴウ（後になって知ったのだが、太守のことをいうのだそうだ）閣下はよく我輩の意を察してくれて、舞台を降りると、我輩の横っ腹に五、六本梯子を掛けると命令された。すると百人余りとおぼしい島民どもが、めいめい肉を山と盛った籠をもってそいつを登り、我輩の口もとへとやって来た。どうやらこれは、我輩に関する知らせがあると同時に、国王の命令でとのえられ、そ

してここへ運ばれて来たものらしい。だいびいろんな獸肉があったようだが、とても味わいわけけることはできなかった。肩の肉、足の肉、腰の肉、形は羊肉かと思えるようであり、調理もじつに見事なものだったが、なにしろ大きさは雲雀ひばりの翼にも及ばない。一口に二片ふたぺら三片さんぺらずつは平らげる、それにパン——これはまた小銃の弾丸ほどの——も一度に三塊さんくわいりずつちようだいした。どんどん後から給仕してくれるのだが、さすがに我輩の図体と大食とは、ありありと目に見えて驚き呆うろたれているようだった。つぎにはまた水が欲しいと手真似をしてやった。我輩の大食ぶりからみて、とうていちよつとやそつとのことでは間に合わないと思てか、じつに利口な奴らで、彼らは一番の大樽おほたるを一つスルスルと吊し上げたかと思うと、我輩の手のほうへゴロゴロと転がして来て、ポンと飲み口を開けてくれた。我輩は一と息に飲み乾してしまつたが、なに、あたり前のことで、量といつても半パイント（約一合半）は怪しい、それに味がまたバーガンディの薄口葡萄酒うすくちぶどうしゅに似て、も一つうまいときているのだから。もう一樽持って来た、だがこれも同様、そして我輩はもつとくれという手真似をしてみせたのだが、今度はもうない